

土曜日授業が復活する？

小中学校は2002年度から週5日制となっていて、土日は学校はお休みですが、文部科学省は昨年、学校教育法施行規則を改定して、土曜日の授業を復活できるようにしました。今年2月には三重県教委が市町教委に通知を出して、「教育委員会の主体的な判断により」土曜授業を進めるよう求めています。そして鈴鹿市教委は、「国・県の動向を受け、土曜授業実施に向け、平成26年度から具体的な調整に着手し、学校の実情に応じて実施する」ことになりました。「主体的な判断」といいながら、実際は県下横並びのスタートとなって、「すぐにやる」か「来年までにやる」かが違うだけです。

子どもたちがのびのび学べる教育環境になるか

先生や保護者の間では、賛成の声や心配する意見など様々ですが、次のような論点を検討しながら、この問題を考えるべきではないかと思います。

いまの「5日制」導入の際、土曜の授業時間を平日に上乘せして「ゆとり」がなくなった。そのまま土曜日を復活すれば、より窮屈になるのでは？

先生たちの「長時間過密労働」が大問題になっているが、土曜勤務の「代休」など取れない実態が、さらに深刻になるのでは？

30人学級がストップしていること、非正規の先生がどんどん増えていることの解決を、先にすべきではないか？

「土曜日の過ごし方」だけを、文科省がなぜあれこれと指図するのか？

第一次安倍政権が始めた「全国学力テスト」、いま安部政権は学校ごとの平均点公表をせまり、競争をあおっている。また、鈴木三重県知事は「学力日本一」をめざすなどと公言している。土曜日授業が、子どもたちを競争させるための手段に使われはしないか？

そもそも、土曜日授業をすれば「学力」が上がるなどと思うことが短絡的だ。教育予算を増やし、先生を増やし、どの子ども伸びる豊かな教育環境を作ろうとせずに、小手先で子どもを操ろうとすることが間違いだ。

上水道は当面、安定経営の見通し

3月末に水道局から「鈴鹿市水道ビジョン（改訂版）」が発表されました。これは2009年に策定された10年計画の「水道ビジョン」を、5年経過した時点での中間検証をしたものです。そのポイントは以下のとおりです。

給水人口は約20万人で今後も横ばい、給水量は1日平均約7万トン、最大給水量も8万トン弱で、現在の給水能力9.54トンで今後も不足する心配はありません。

水道料金については、現在1トン当り供給単価が152.17円、これは給水原価148.26円を上回っていて、黒字を維持しています。今後も気をつけて経営をしていけば、すぐに料金値上げを迫られるような事態にはなりません。課題としては、老朽施設の計画的な更新、とくに基幹施設の耐震化を進めていくこと、想定される東南海地震などへの対応が求められています。

水道は市民にとって最も大事な公共サービス

以上のように、鈴鹿市の水道事業はしばらくの間は安定経営ができる見通しです。この「水道ビジョン」を読んで、ホッと安心しました。

振り返って見ると、2000年に立てられた第5期拡張計画は、「平成22年に最大給水量12万5千トン」という超過大な予測のもとに、長良川河口堰からの水を大量に入れるというものでした。私たちは当時の議会で毎回、水道問題で質問したり、飲み水をまもる市民運動を取り組んで、河口堰からの導水計画をストップさせるために力を尽くしました。

この道理ある論戦や市民の声によって2008年、5期計画は変更、最大給水量を3万トンもダウン、総事業費も100億円引き下げられ、ムダな投資は避けられました。このような経過をたどって、いまの水道事業は、鈴鹿市の「身の丈に合った」計画となっています。

道路や公共施設を作っても、それを全市民が利用することはありませんが、水道の水を使わない、飲まないという市民は一人もいません。水道ほど、公共性の高い事業はないと言えます。しかも、独立採算で運営しており、税金はほとんど投入されていません。

「そろそろ料金の値上げを検討すべき」「民間委託でコストを下げろ」などの議論もありますが、私は、市民の命と暮らしを支えるライフラインである水道は、市が責任をもって行なう最も大事な公共サービスだと考えます。

「高齢者の総合窓口」作ると言うが

末松市長は3月議会冒頭の「施政方針」の中で、「福祉の充実については、鈴鹿市社会福祉協議会と連携しながら、高齢者のための総合相談窓口を4つの地区市民センターへ試行的に開設するなど、市民の皆様の身近な相談体制を充実する」と表明しました。

これは良いことだと思い、生活福祉委員会の中で、具体的な内容を聞こうとしました。どこの市民センターを窓口にするのか、スタッフは何人か・・・など。ところが、返ってきたのは「併設公民館の部屋を借りて、地区社協の方たちが相談に応じる。センターの職員は参加しない、専門家も地域包括支援センターも関与しない」という、ビックリするような答弁でした。これでは、公民館の一室で、地区の役員さんがお年寄りの世間話の相手になる程度のもので、とても「総合相談窓口」などと言えたものではありません。

市長の施政方針の原稿にしっかりと明記された「新年度の重点施策」だと思ったら、単なる「出来たらいいなあ」という願望が書いてあっただけです。こんなことは、長く議員をしていますが初めてのことです。今も市のホームページにそのまま出ているので、何かの間違いではないようですが・・・。

若松地区議会報告会に参加しました

市議会としての第3回「議会報告会」が4月22日夜、3ヶ所で行なわれ、私は若松公民館に参加しました。漁師町の気風があり、参加した住民の皆さんもはっきりもの言う人が多くて、にぎやかな会合になりました。

私は「防災安全特別委員会」の報告を担当しましたが、住民からは「若松は津波の時の避難ビルがない、どう考えるのか」「石田さんの所は海拔81メートルで津波は来ないから、どうでもええと思っとるのか」などと、鋭い意見が相次ぎました。委員会としては避難タワーを作る必要があるとの認識だと、説明はしましたが、市当局に代わって「やります」などと答弁は出来ないで、住民の皆さんはもどかしく感じたのではと思います。

また、報告の内容が「第 号議案は・・・」というような堅苦しいセリフが続くので、「聞いても分からん」との意見も多く出ました。そりゃそうでしょう、議員が聞いてもよく分からないことが沢山あるのだから。住民の皆さんが払った税金が、ちゃんと使われているのか、暮らしがどうなっているのか、何が問題なのか、もっと普段着の言葉で話さなければと思いました。

ずいそう



神去村のなあなあ精神

三浦しをん著「神去なあなあ日常」が映画になり、5月から上映される。津市美杉町（旧美杉村）を舞台とし、撮影も美杉で行なわれたもので、上映が楽しみである。三浦しをん原作の映画は、箱根駅伝がテーマの「風が強く吹いている」も、辞書編さん者を描いた「舟を編む」も、エリートでもない普通の若者がいろんな体験をしながら成長していく物語であったが、今回も後味さわやかな、今風の青春ドラマである。

横浜の高校を出たものの、目標もなくフリーターで過ごすつもりだった主人公・勇気が、なぜか突然、三重県の山奥・神去村で山仕事に就職、毎日スギやヒノキを相手に悪戦苦闘する。携帯電話も通じない山奥だが、村の人々と共に働き生活するうちに、「なあなあ」（ゆっくり行こう、まあ落ち着けという意味の神去村の方言）精神で暮らすライフスタイルの心地よさに気がついていく。

山里の仕事と暮らしが途絶えれば山が荒れていく

山の仕事は、田畑のように今年植えて今年収穫という短期サイクルではなく、50年、100年単位のサイクルである。いま切り倒して売る木は、先代か先々代が植えてくれたもので、いま植える苗は、子か孫の代で商品になるものである。毎年の下刈りや枝打ちの仕事は、その長いサイクルの1過程であり、目先の損得や「費用対効果」というものさしでは計れない。しかし、そのサイクルが途絶えると、山は荒れてしまい自然環境にも人の生活にも悪影響をおよぼす。近年、サルやシカ、イノシシが里に出てくるようになったのも、山が荒れてきたからだ。うちの近くの山でいくらでも取れたワラビやタラなどの山菜も、めったに見られなくなっている。

かつてはわが村・伊船新田でも、小岐須の山奥に「組の山」があって、毎年の春夏に何回か下刈りなどの「出合い作業」があった。私も若い頃「奥山の出合い」に参加したことがある。八チに刺されたり顔がかぶれたりしながら、急斜面にヒノキ苗を植える作業もした。それが30年ほど前から、山砂利をとる会社の借地となり、出合い作業はなくなり、寝ていても借地料が入ってくるようになった。今では、登山の時しか山には入らなくなってしまった。